



® 平成 29 年 11 月 1 日 (水)

No. 14561 1部370円(税込み)

発行所

一般財団法人 経済産業調査会
東京都中央区銀座2-8-9 (木挽館銀座ビル)
郵便番号 104-0061
[電話] 03-3535-3052 [FAX] 03-3567-4671

近畿本部 〒540-0012 大阪市中央区谷町1-7-4
(MF天満橋ビル8階) [電話] 06-6941-8971

経済産業調査会ポータルサイト <http://www.chosakai.or.jp/>

特許ニュースは

●知的財産中心の法律、判決、行政および技術開発、技術
予測等の専門情報紙です。

定期購読料 1カ年61,560円 6カ年32,400円
(税込み・配送料実費)

本紙内容の全部又は一部の無断複写・複製・転載及び
入力を禁じます(著作権法上の例外を除きます)。

目次

☆成長戦略に必要な経営理論《知財版》④④…(1)

☆フラッシュ(特許庁人事異動)……………(8)

成長戦略に必要な経営理論《知財版》④④

もし知財人財が“戦略的思考”をもって 世界を見たならば(その8)

正林国際特許商標事務所

所長弁理士 正林 真之

1. はじめに

「光あるところに影がある」のナレーションで始まる忍者のアニメがかつてあったが、暗いところから明るいところに出ると、眩しすぎて目が開けられない。逆に、明るいところから急に暗いところに入ると、とたんに何も見えなくなり、多くの人は不安に襲われる。

ただ、この現象と同一視はできないものの、光の

あるところに住む「光の中の住人」は闇を恐れ、暗闇の中に住む「闇の中の住人」は光を恐れる。これはあくまで比喩であるが、ここで言う「光」というのは、「知識」のことである。すなわち、知識ある者は無知を恐れ、無知なる者の集団は、知識ある者を恐れると、そういうことである。

こう言われると、果たして何を言いたいのか、キツネにつままれたような気分になるかもしれない。



SINCE 1891

特許業務法人 浅村特許事務所

〒140-0002 東京都品川区東品川2丁目2番24号 天王洲セントラルタワー
電話: 03-5715-8651(代) FAX: 03-5460-6310・6320 asamura@asamura.jp www.asamura.jp

所長 弁理士 金後 水白 金岩 井松 原大 日方 浅村 昌弘 高
井藤 本江 森見 上宮 晴義 克久 晶 慎 尋 亮 和
建男 光則 司 啓一 統 太 幸

会長 弁理士 浅池 望井 浅橋 田中 渡岡 村田 月上 野本 統山 部野 幸良 洋裕 裕 博理 光 皓弘 次一 郎之 誠 登 恵 男

副所長 弁理士 浅平 下畑 弓北 龜坂 伊福 村山 村中 削川 山倉 藤井 昌啓 克孝 麻 育 夏 由 弘子 彦之 理 亮也 子 里 淳

弁理士 山 龜大 新 高 篠水 田 林 口岡 塚村 田 野 中 康幹 一守 伸 卓 裕 祐 銘 明生 貴男 一宏 宣子 三

浅村法律事務所
所長 弁理士 浅村 昌弘 高
弁理士 浅村 和 田

電話: 03-5715-8640(代) FAX: 03-3540-1997 E-mail: law@asamura.jp
弁理士 後藤 晴 男 弁理士 松川 直 樹 弁理士 和田 研 史

もちろん、これを読んでいる読者の殆どは、「光の中の住人」であり、知識を持っていることを是としている方々である。そうした「光の中の住人」というのは、暗闇(=無知)というものを恐れるものである。

しかしながら、自らを「闇の中の住人」と自負している方々というのは、むしろ少数である。最も恐ろしいのは、むしろ、知らぬうちに、いつのまにか「闇の中の住人」になってしまっていることである。実は、何を隠そう、これを読んでいる読者の中にも、そういった現象が見られることがあるのである。

けれども、急にそんなことを言われたところで、心当たりは全くないし、何を言われているのか、さっぱりわからないであろう。そう、普段から自覚の無いものは、突然に聞かれたとしても直ぐには分からない。

では、こんな質問をしてみることにしよう。それは、「“成功”の反対は何か?！」ということである。

ここで、「“成功”の反対は何か?！」と聞かれれば、それは成功の反対概念である“失敗”に決まっているのではないか。そう考えるのが普通である。けれども、あえてそれを聞くぐらいだから、「成功の反対は失敗」というような単純な話ではないだろうと、多くの読者は思っているに違いない。そしてそれは、もっともなことである。

では、ちょっと視点を変えて、「“成功”の先にあるのは、何であろうか?！」そして「“失敗”の先にあるのは、何であろうか?！」ということを考えてみたいと思う。そう、その目的達成を諦めない限り、失敗の先にあるものは成功である。もちろん、以前にも述べたことがあるように、成功というのは失敗を扱うときよりも、はるかに難しい。成功して墮落した例は、枚挙に暇がない。失敗というのは、それをしたときに、成功へと駆り立てるものが、自分自身にも、周囲にも存在する。けれども、成功者に対して、それが墮落するかどうかは、全くをもって本人次第からである。

けれども、言えることは、成功の先にあるのは、繁栄か墮落であり、失敗ではない。そしてまた、あえて言うまでもないが、目標達成を諦めない限り、失敗の先にあるのは成功であり、その意味では、「失敗というのは成功に至るまでの一過程に過ぎない」

ということになる。

ここで、少し話はずれるが、「利口になること」と「馬鹿になること」は、完全なる反対事象ではない。何となれば、「利口になることよりも、馬鹿にならないことのほうが遥かに重要である」ということが、よくあるのである。例えば、先に述べた「成功者が自墮落する」ことを防ぐためには、利口になってもらうよりもむしろ馬鹿にならないようにしてもらふことのほうが、はるかに重要なのである。

これは、成功というものは一步一步着実に積み上げていくようなものであるのに対し、失敗というのは、それこそ転がり落ちるように、あっという間に奈落の底に落ちていくようなものだからである。これは何も、事業を実際に行った方だけでなく、株式投資のようなものをした方とて経験することである。したがって、賢い人というのは、積極的に利口になるよりもむしろ、馬鹿にならない途を選ぶ。すなわち、消極策に出るのである。

また、何もしなければ、もちろん成功はしないが、失敗もしない。こうしたことが、「成功の反対は失敗」、だから「失敗というものは、絶対にしたくない」という考えを生み出し、人々を更に消極的にしていく。そこに、日本企業特有の「減点方式」という人事考課が極めて有効に作用し、人々は益々消極的になって行く。そして更に、ある問題が起きてしまったようなときには、日本人特有の解決策である「問題というものを積極的に解決することはしない」「むしろ、問題を先送りにして、問題が解消するのを待つ」という戦法に出る。そこには、積極的に打って出ようという意思すら見出すことはできない。

2. イノベーションが起こらない世界

「何もしないこと」によりどうなるか、ということは既に歴史が証明している。キリストが死んでワットが誕生するまでの約1700年の間、ヨーロッパの一人当たりGDPは、たったの170ドルしか上がらなかったという(インビジブル・エッジより)。この時代は、童謡の「大きなのっぽの古時計」の歌詞ではないが、100年間も同じ時計を使っている。そして、この歌詞からうかがえることは、この少年も、その父も、その歌の中ではまさに臨終の床に臥せている祖父も、皆が同じ生活様式で、同レベルの生活を